

陶淵明「帰園田居」五首における住居について： 「方宅十余畝、草屋六七間」句を中心に

土屋， 聡
岡山大学教育学域：准教授

<https://doi.org/10.15017/6796451>

出版情報：中国文学論集. 51, pp.40-58, 2022-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



陶淵明「帰園田居」五首における住居について

——「方宅十余畝、草屋六七間」句を中心に——

土 屋 聡

一、陶詩の住居についての先行研究

陶淵明詩文に描かれた住居については、既に専論も多い。近年では増野弘幸氏の一連の論考をはじめ、陶詩の住居は単なる背景ではなく、作者陶淵明の心情が反映されたものとして捉えようとする立場からの研究が主流となっている^{〔1〕}。筆者もそのような捉えかた自体には賛同するものであるが、しかし、個々の表現については、それがどのような心情と結びついたものか、なお検討を要するものがあると考えている。

さて、「帰園田居」五首 其一詩の「方宅十余畝、草屋六七間」句は、作者陶淵明がその住居の規模について具体的に言及したものであり、彼の詩文における住居が論じられる際には取り上げられることの多い詩句である。しかしながら、作者の心情との関係という観点から見た場合、未だ充分に検討されているとは言えない。

そこで本稿では、この二句の特徴を明らかにした上で、作者のどのような心情が反映されたものであるかについて考察したい。

二、「方宅十余畝」句の従来解釈

帰園田居五首其一^②

- 1 少無適俗韻 わが 少くして俗に適ふ韻無く
- 2 性本愛邱山 性もと丘山を愛す
- 3 誤落塵網中 誤りて塵網の中に落ち
- 4 一去三十年 一たび去りて三十年
- 5 羈鳥戀舊林 羈鳥旧林を恋ひ
- 6 池魚思故淵 池魚故淵を思ふ
- 7 開荒南野際 荒を南野の際に開き
- 8 守拙歸園田 拙を守りて園田に歸る
- 9 方宅十余畝 方宅十余畝
- 10 草屋八九間 草屋八九間
- 11 榆柳蔭後簷 榆柳後簷を陰ひ おほ
- 12 桃李羅堂前 桃李堂前に羅なる るゐ
- 13 曖曖遠人村 曖曖たる遠人の村
- 14 依依墟里煙 依依たる墟里の煙
- 15 狗吠深巷中 狗は吠ゆ深巷の中
- 16 鷄鳴桑樹顛 鷄は鳴く桑樹の顛 いただき
- 17 戶庭無塵雜 戶庭塵雜無く
- 18 虛室有餘閒 虛室余閒有り
- 19 久在樊籠裏 久しく樊籠の裏に在るも うち

陶淵明「帰園田居」五首における住居について

20 復得返自然 復た自然に返るを得たり

(卷二)

義熙元年(四〇五)、陶淵明は職を辞して帰郷し、翌二年(四〇六)に「帰園田居」詩五首を制作した。⁽³⁾

生来、世俗と調和する性格ではなかったが、長らく官僚の世界に束縛されていた。捕らえられた鳥や魚はもとい林や川を忘れないものであるが、同様に、自分もこうして故郷の「園田」に戻ってきた、と作者は述べる。そして問題の「方宅十余畝、草屋六七間」句があり、その後は作者の住環境の描写が展開される。ここで先行する主な注釈を確認しておこう。ただし、「草屋六七間」句については、解釈に特段の相違はないため省略する。

○「方宅十余畝」は、宅地が比較的広いことを言う。「晋書」呉隱之伝に「数畝の小宅、内外に茅屋六間あり」と。晋代の一畝は現在よりも小さい。⁽⁴⁾

○「方宅」は方形の住宅。この句は住宅の敷地面積が十畝あまりであることを言う。按ずるに、晋代の一畝の面積は現在の一畝ほど大きくない。⁽⁵⁾

○「方」は方円。この句は宅地が広く、あわせて十畝あまりであることを言う。⁽⁶⁾

○上句は家屋周囲の園圃を言い、下句は家屋を言う。「方」は方円、周囲。⁽⁷⁾

○方宅は四角な屋敷。⁽⁸⁾

○「方宅」方は四角、宅は宅地。「十余畝」畝は面積の単位、『詩経』魏風の詩に「十畝の間、桑つむ者閑閑たり」といい、鄭箋は、いにしえ一夫に百畝の土地が与えられ、そのあまりにせまいこととするが、ここでは宅地として適当な広さをいう。⁽⁹⁾

○「方宅」四角い家の敷地。「十余畝」一畝は、約五アールの広さ。⁽¹⁰⁾

○「方宅」四角な宅地。「方」は、方形。「宅」は、宅地。家屋敷の敷地。「十余畝」十畝余り。一畝は、約五アール。当時の五〇アール余りは、地方の中流士人の住宅としてごちんまりした適度な広さ。⁽¹¹⁾

「方宅」を宅地とする解釈がほとんどであるが、袁行霈氏書のみは周囲の園圃を含めたものとしている。このような解釈は他にもあり、魏正申『陶淵明集訳注』(一九九四年、文津出版社。185頁)では「住宅のそばに十畝あまりの

(田部井文雄・上田武『陶淵明全釈』)

(都留春雄・釜谷武志『陶淵明』)

(斯波六郎『陶淵明詩訳注』)

(袁行霈『陶淵明箋注』)

(孫鈞錫『陶淵明集校注』)

(唐滿先『陶淵明集浅注』)

(逯欽立『陶淵明集』)

土地がある（住宅的旁边有十多畝地）」と訳している。後述するが、東晋の十畝は5165m²（51.65a）である。仮に正方形であるとすれば一辺が約71.8mの四角形であり、確かに住居のみの面積としては広すぎるであろう。

范子燁氏は、『芸文類聚』巻六十五（産業部上「園」）に引く「雜詩」が「方澤十餘畝」に作っていることに着目し、本来のテキストでは「方澤」であった可能性を指摘している¹²。しかし、本稿では当時の「宅」の実態から考えて、袁行霈氏や魏正申氏の解釈に従う。

次の記事から窺われるように、「宅」は住居のみであるとは限らない。

庾詵字彥寶、新野人也。……十畝之宅、山池居半。蔬食弊衣、不治産業。

庾詵字は彥宝、新野の人なり。……十畝の宅、山池半ばを居む。蔬食^{そく}弊衣にして、産業を治めず。

（『梁書』処士伝・庾詵伝）

庾詵の十畝の「宅」は、その半分を山や池が占めていたという¹³。おそらく住居は「宅」の一部を占めたに過ぎないであろう。この記事は庾詵の清貧を述べた例であるが、当時の「宅」は、渡辺信一郎『中国古代社会論』（一九八六年、青木書店。136頁）に指摘されているように、蔬菜栽培を行う園圃が附設されていた。

陶淵明の詩では、「新葵鬱北牖、嘉稊養南疇（新葵北牖に鬱として、嘉稊南疇に養ふ）」（卷二「酬劉柴桑」）のように、屋内からの眺めとして園圃を描くものがある。「葵」は当時の蔬菜の代表的なものであるが、こんもりと繁茂している様子が窓から見える、ということは、園圃が住居に隣接していたことを示唆するものである¹⁴。

「宅」が以上のようなものであったとすれば、「帰園田居」五首其一詩においても、園圃を含めて「宅」と称した可能性は充分に考えられる。本稿では、住居と園圃とを併せた面積が「十余畝」であった、と考えたい。

三、「方宅十余畝」句について

六朝期の詩文で住居に言及した作品は、陶淵明の他にもある。ここではそれらとの比較によって、「方宅十余畝」という表現の特徴を考えてみよう。まず注目したいのは、束皙（二六一―三〇〇）「近遊賦」である。束皙は陶淵明

陶淵明「帰園田居」五首における住居について

が特に親近感を持った人物とされている。「近遊賦」は隠者の目を通じて農村を描くものであり、その意味で陶淵明の先駆的作品と位置づけられる。

世有逸民、在乎田疇。宅彌五畝、志狹九州。安窮賦於下里、寔玄淡而無求。乘華輅之偃蹇、駕蘭單之疲牛。⁽¹⁵⁾

世に逸民有り、田疇に在り。宅は五畝に弥り、志は九州を狭しとす。窮賦に下里に安んじ、玄淡にして求むる無きに寔たり。華輅の偃蹇たるに乗り、蘭單の疲牛に駕す。

ここでは、「逸民」の宅が「五畝」であると言う。「九州」を狭しとする「志」と対比的に述べていることからすれば、「五畝」は狭小であることを言うものである。これを現在のメートル法に換算する前に、次の作品も見てみよう。孫綽（三一四？～三七一？）「遂初賦」序である。

余少慕老莊之道、仰其風流久矣。却感於陵賢妻之言、悵然悟之。乃經始東山、建五畝之宅、帶長阜、倚茂林。孰與坐華幕擊鍾鼓者、同年而語其樂哉。⁽¹⁷⁾

余れ少きより老莊の道を慕ひ、其の風流を仰ぐこと久し。却つて於陵の賢妻の言に感じ、悵然としてこれを悟る。乃ち東山に經始し、五畝の宅を建て、長阜を帶び、茂林に倚る。華幕に坐して鍾鼓を撃つ者と孰（い）れぞ、年を同じくして其の樂しみを語らんや。

孫綽は於陵子の妻（『列女伝』巻四）に感じて隱棲を決意したと言うが、彼もまた会稽（浙江省紹興市）の東山に建てた住居を「五畝の宅」と称している。この一致は偶然ではなく、実は共通の典故に因るものである。『孟子』梁惠王章句上に次のように言う（『十三經注疏』一九八五年、台灣芸文印書館。第八冊、『孟子注疏』12頁）。

五畝之宅、樹之以桑、五十者可以衣帛矣。雞豚狗彘之畜、無失其時、七十者可以食肉矣。百畝之田、勿奪其時、數口之家可以無飢矣。

五畝の宅、これに樹うるに桑を以てすれば、五十の者以て帛を衣るべし。鶏豚狗彘の畜、其の時を失ふ無くんば、七十の者以て肉を食ふべし。百畝の田、其の時を奪ふ勿くんば、數口の家以て飢うる無かるべし。孟子の主張するところでは、「五畝の宅」「百畝の田」とは「數口」の家族の生活が成り立ち得る住居および耕地の規模とされている。度量衡について、本稿では頼惟勤・石川忠久訳『資治通鑑選』（中国古典文学大系 14 卷、一

九七〇年、平凡社）に附せられた「中国歴代度量衡基準単位表」（494頁）に拠るが、周（春秋・戦国）における一畝は $1.427a = 142.7m^2$ あり、「五畝」は $713.5m^2$ となる。

しかし、西晋における一畝は $458.6m^2$ あり、東晋における一畝は $516.5m^2$ 、十畝は $5165m^2$ である。『孟子』に倣った「五畝」という表現は、もはや晋代の実態とは乖離したものになっているのである。ちなみに、仮に『孟子』の「五畝（ $713.5m^2$ ）」の面積を東晋の数字で表すとすれば、「一畝（約 1.38 畝 $\equiv 713.5m^2$ ）」となるであろう。このような変化は晋人も理解していたようであり、泰始四年（二六八）の傅玄（二七〇—二七八）「上疏」に「其四曰、古以步百爲畝、今以二百四十步爲一畝、所覺過倍（其の四に曰はく、古へは歩百を以て畝と爲し、今は二百四十歩を以て一畝と爲す、覚ぶる所は倍を過ぐ）」（『晋書』傅玄伝）とある。おそろく束皙や孫綽も「五畝」が実数としては意味を持たないことを理解していたはずであり、むしろ彼らは孟子が説く「一応の生活が成り立つ農民の住居」というイメージを取り入れようとしたのであろう。その意味では觀念的な住居の表現である。

ところで、六朝期の詩文を対象に「宅」の大きさに関わる表現を調査した結果、束皙や孫綽のように『孟子』を典故とする用例としては、江淹「与交友論隱書」および張充「与王儉書」の二例があった。

望在五畝之宅、半頃之田。鳥赴簷上、水匝階下、則請從此隱、長謝故人。⁽¹⁹⁾

望みは五畝の宅、半頃の田に在り。鳥簷上に赴き、水階下に匝れば、則ち此の隱に従ひ、長く故人に謝せんことを請ふ。

（『江文通集彙註』卷九）

半頃之田、足以輸稅。五畝之宅、樹以桑麻。嘯歌於川澤之間、諷味於澠池之上、泛濫於漁父之遊、偃息於卜居之下。如此而已、充何謝焉。⁽²⁰⁾

半頃の田、以て税を輸むるに足る。五畝の宅、樹うるに桑麻を以てす。川沢の間に嘯歌し、澠池の上に諷味し、漁父の遊ぶに泛濫し、卜居の下に偃息す。此くの如きのみ、充何ぞ謝せん。

（『梁書』張充伝）

以上の諸例によって、陶淵明の前後の時代では、「五畝の宅」は隱者の住居のイメージとして常套的に用いられる表現であったことが窺われる。これに対して「帰園田居」五首其一詩は、具体的な数字によって現実感を持たせながら住居を描くものである。「十余畝」「八九間」は、確かに幅のある表現ではあるが、「五畝の宅」という表現が普

陶淵明「帰園田居」五首における住居について

通に行われている中に置いてみれば、やはり数値化して表そうとしたところに作者の新しさがあるとしなければならぬ⁽²¹⁾。数値化は現状を把握する手段である。このことを踏まえて、次に「草屋八九間」についても検討しよう。

四、「草屋八九間」句について

第二節に挙げた遼欽立氏書では、「方宅十余畝」句の注として『晋書』良吏伝・呉隱之伝が引用されている。

歸舟之日、装無餘資。及至、數畝小宅、籬垣仄陋、内外茅屋六間、不容妻子。劉裕賜車牛、更爲起宅、固辭。歸舟の日、装ふに余資無し。至るに及び、數畝の小宅、籬垣仄陋にして、内外に茅屋六間あり、妻子を容れず。劉裕車牛を賜ひ、更に爲に宅を起こすも、固く辞す。

呉隱之は陶淵明とほぼ同時の人であるが、「茅屋六間」で妻子を容れることができないという。「間」とは、木造建築において四隅に立てられた柱の内側の平面を指し、建築物を構成する最小単位となる。朱大渭ほか『魏晉南北朝社会生活史』(二〇一九年、中国社会科学出版社。131頁。初版は一九九八年)には、下級官僚および一般庶民の住居は数間から十数間までが多かったことが指摘されている。

其一詩の「草屋八九間」よりも広いものとしては、山濤の例が挙げられる。

左長史范晷等上言、「濤舊第屋十間、子孫不相容」。

左長史范晷等上言して、「濤の旧第屋十間、子孫相容れず」と。帝これが爲に室を立つ。

(『晋書』山濤伝)

山濤の住居は「十間」であるが、この場合でも子孫を容れることができなかったため、武帝司馬炎は「室」を建てたという。呉隱之や山濤の記事は貧窮であることを示すものであるが、その中間の規模である「八九間」も余裕のある暮らしを表すものとは言えないであろう。しかし、極端な貧窮とも言えない。さらに小さな住居に暮らす人々も存在したためである。

太妃家在健康縣界、家貧、有草屋兩三間。

太妃の家健康県界に在り、家貧にして、草屋兩三間有り。

〔宋書〕明帝陳貴妃伝

除奉朝請不就、兄弟三人共處蓬室一間、爲風所倒、無以葺之。

奉朝請に除せらるるも就かず、兄弟三人共に蓬室一間に処り、風の倒す所と爲るも、以てこれに葺く無し。

〔南史〕劉瓛伝

このように見てくると、「草屋八九間」は朱大渭氏書に指摘されている下級官僚や一般庶民の住居の範圍内に収まるものであつて、生活の余裕やあるいは極端な貧窮を主張するものではないと考えられる。だとすれば、「方宅十余畝」と同様、数字を具体的に提示すること自体に作者の意図があつたと見ることもできよう。少なくとも、類似した表現が史書に散見していることからすれば、この句が史書の書きぶりを取り入れて実録ふうを描こうとしたものであることは、疑いのないところである。

さて、「〇屋〇〇間」という住居の表現は、陶淵明を除くと六朝期の詩文にはほとんど見られない。そこで調査の範圍を唐詩に広げて類似する表現を搜索してみると、白居易に次のような三例を見つけることができた。

常樂里閑居偶題十六韻 兼寄劉十五公輿・王十一起・呂二旻・呂四穎・崔十八玄亮・元九稹・劉三十二敦質・張十五仲方時為校書郎

13 茅屋四五間 茅屋四五間

14 一馬二僕夫 一馬二僕夫

15 俸錢萬六千 俸錢萬六千

16 月給亦有餘 月づき給りて亦た余り有り

17 既無衣食牽 既に衣食の牽無く

18 亦少人事拘 亦た人事の拘少し

19 遂使少年心 遂に少年の心をして

20 日日常晏如 日日常に晏如たらしむ

この詩は、貞元十九年（八〇三）、白居易が書判拔萃科に及第して校書郎となり、長安常樂里に居を構えた時期

陶淵明「歸園田居」五首における住居について

に、劉十五公興以下の同僚たちに寄せたものである。常楽里の住居は、もともと宰相関播（七一九～七九七）の邸宅の一部であって、決して粗末な家ではない。²⁴ 作者はそこに一頭の馬とふたりの下僕とともに住み、月に錢一万六千という充分な俸給を得ながら、のんびりと暮らしている。

西原晚望

13 故園汴水上 ほとり 故園汴水の上

14 離亂不堪去 離乱去るに堪へず

15 近歲始移家 近歲始めて家を移し

16 飄然此村住 飄然として此の村に住む

17 新屋五六間 新屋五六間

18 古槐八九樹 古槐八九樹

19 便是衰病身 便ち是れ衰病の身

20 此生終老處 此の生終老の處

元和六年（八一二）、白居易は母陳氏の喪に服して長安郊外の下邨に居を移した。この詩はその時期のものである。新たに建てられた「五六間」の住居と、その地に古くから生えている「八九樹」の槐とが対比的に描かれており、この村に新たに移住してきた作者白居易は、ここを終の棲家として生涯を送ることを決意する。

題王處士郊居

1 半依雲渚半依山 半ばは雲渚に依り半ばは山に依る

2 愛此令人不欲還 こゝ 此を愛して人をして還るを欲せざらしむ

3 負郭田園八九頃 郭を負ふ田園八九頃

4 向陽茅屋兩三間 陽に向ふ茅屋兩三間

5 寒松縱老風標在 たと 寒松縱ひ老ゆるも風標在り

6 野鶴雖飢飲啄閑 野鶴飢えたりと雖も飲啄閑なり

（『白氏文集』卷十・〇四七四）

7 一臥江村來早晚 一たび江村に臥して 來^{このかた}早晚^{いくばく}ぞ

8 著書盈帙鬢毛斑 著書帙に盈^みちて鬢毛斑^{まだら}なり

〔白氏文集〕卷十五・〇八八六

この詩は、王処士なる人物の郊外の寓居に題したものである。その田園は「八九頃」、住居は南向きの「茅屋兩三間」である。「寒松」「野鶴」は王処士の姿そのものであり、老いても風采があり、充分とは言えない食事にも悠然としている。王処士がこの村に仮寓してからどのくらいの年月が経ったかはわからないが、その間、晴耕雨読の学究的生活を送ってきたのであろう。王処士が愛してやまないのは、そうした生活全般なのである。

以上の詩の共通点としては、住居と共に生活のありようが描かれていることが指摘できよう。住居は生活の拠点である。これを細緻に描くことは生活をありのままに写すことに他ならない。そして、そこでの生活に何を思うか、たとえば充実した生活への満足、新生活への展望、これまでの生活への愛着など、その時々 생각이綴られる。そこには、生活を営む主人公として、心情をも含めてあるがままの現実を描こうとする作者白居易の意識が窺われる。

五、「帰園田居」五首における住居

以上のように見てくると、「方宅十余畝、草屋六七間」句も、新たに始まる農耕生活に対する作者陶淵明の心情を反映した表現と言えそうである。結びの四句を再掲しよう。

17 戸庭無塵雜 戸庭塵雜無^く

18 虛室有餘閒 虛室余閒有^り

19 久在樊籠裏 久しく樊籠の裏^{うち}に在るも

20 復得返自然 復た自然に返るを得たり

(卷二「帰園田居」五首其一)

住居と心情との結びつきという観点から言えば、「虚室」が注目される。この語は『莊子』人間世篇に見える。

瞻彼闕者、虚室生白。

彼の闕^{とぎ}せる者を瞻^みれば、虚室^{ひかり}に白^(白)を生ず。

陶淵明「帰園田居」五首における住居について

閉ざされた空虚な部屋に射し込む光は鮮明に映る。これは、司馬彪の注に「室比喻心（室は心に比喻す）」とあり、さかしらな知恵を捨てることによつて幸福が得られる、ということを空虚な部屋によつて喻えたものである。「虚室余閑有り」句は、「戸庭塵雜無く」句と対句を構成しており、表面的には夾雜物のない部屋を指すものである。しかし、「虚室」が心の比喻でもあるとすれば、作者は自分の心と住居とを重ね合せているということになる。やはり住居は彼の心なのである。

また、結句「久しく樊籠の裏に在るも、復た自然に返るを得たり」では、ようやく自分の求める生活に入った作者の満足を読み取ることができる。窮屈な官僚世界から脱出した喜びや新しい生活への期待から、「方宅十余畝、草屋六七間」句以下の住環境の描写が生まれたと見ることは可能であろう。

しかし、そうした喜びや期待のみでは、数値化して表現しようとした作者の意識に説明をつけることができない。幸いに「帰園田居」詩は連作詩である。そこで次に、其二詩以降における作者の心情の動きを見てみたい。

- 1 野外罕人事 野外人事^{まれ}罕に
- 2 窮巷寡輪鞅 窮巷^{すくな}輪鞅寡し
- 3 白日掩荆扉 白日^{おほ}荆扉を掩ひ
- 4 虚室絶塵想 虚室^ま塵想を絶つ
- 5 時復墟曲中 時に復た墟曲^まの中
- 6 披草共來往 草を披^{ひら}きて共に來往す
- 7 相見無雜言 相ひ見て雜言^{ひら}無く
- 8 但道桑麻長 但だ道^いふ桑麻長しと
- 9 桑麻日已長 桑麻日に已に長じ
- 10 我土日已廣 我が土日に已に広し
- 11 常恐霜霰至 常に恐る霜霰^{ひら}の至り
- 12 零落同草莽 零落して草莽に同じきを

（卷二「帰園田居」五首其二）

都を離れた農村では、家々の間の路地にまで官僚連中の車馬が来ることはない。昼もなお柴折戸を閉ざし、外界との接触を遮断している。第四句「虚室」は、其一詩末と同様に、住居の空虚なことに同時に作者の心をも指すであろうが、世俗への思いをバツサリと絶ちきると言う。其一詩から引き続き、閉ざされた部屋に籠もって世俗との関わりを絶つ作者の姿が描かれる。

しかし、ここで作者は住居を出て、少しずつ活動を始める。彼は全ての人間との関わりを絶つたのではない。作者と新たな関係を結ぶのは「墟里」の農民たちである。彼らとは余計なことは語らず、ただ作物の生長のみを関心事とする。作物の生長、耕地の拡大、農家にとっては手応えを実感するできごとであろう。同時にそれが水泡に帰することは、何よりも恐ろしく、常に頭を痛める悩み事なのである。

1 種豆南山下 豆を種う南山の下

2 草盛豆苗稀 草盛んにして豆苗稀なり

3 晨興理荒穢 晨に興きて荒穢を理め

4 帶月荷鋤歸 月を帯びて鋤を荷ひて帰る

5 道狹草木長 道狭くして草木長じ

6 夕露霑我衣 夕露我が衣を霑す

7 衣沾不足惜 衣の霑ふは惜しむに足らず

8 但使願無違 但だ願ひをして違ふ無からしめん

(卷二「帰園田居」五首其三)

其三詩においても、作者の農耕生活の様子が描かれる。南山の麓にあるという豆畑を、朝早くから夜になるまで除草する。そして一日の仕事を終えると、月明かりの下、鋤を背負って帰る。恐らくは自宅周辺の菜園ではなく、やや離れた場所の耕地を描いたものであろう。家への道は狭く、草木は伸びている。その草木に降りた露が衣服を濡らす、しかし、それよりも豆がうまく生育することをひたすら願う。これもまた農家としての作者の実感のこもった言葉である。

「南山」と言えば、前漢の楊惲（？～前五四）が想起される。司馬遷の娘を母に持つ彼は、平通侯の爵位を得て、

陶淵明「帰園田居」五首における住居について

宣帝（在位前七四～前四八）に親近されたが、讒言によつて爵位を失ひ、庶人に落とされた。その友人孫会宗に宛てた書簡「報孫会宗書」には、次のように言う。

奴婢歌者數人、酒後耳熱、仰天撫缶而呼嗚嗚。其詩曰、「田彼南山、蕪穢不治。種一頃豆、落而爲其」。人生行樂耳、須富貴何時。是日也、拂衣而喜、奮袖低昂、頓足起舞、誠淫荒無度、不知其不可也。

奴婢の歌ふ者數人、酒後耳熱すれば、天を仰ぎ缶を撫ちて嗚嗚と呼ぶ。其の詩に曰はく、「彼の南山に田づくるも、蕪穢にして治まらず。一頃の豆を種うるも、落ちて其と爲る」と。人生は行樂せんのみ、富貴を須つも何れの時ぞ。是の日や、衣を払ひて喜び、袖を奮ひて低昂し、足を頓み起ちて舞ふ、誠に淫荒度無きも、其の不可なるを知らざるなり。

（『文選』卷四十一）

畑を耕しても荒れ放題、豆を植えても実らないとは、宮廷を追われた楊惲の不平を代弁するものでもあろう。農夫となつた彼は酒宴を開き、奴婢たちにこの歌を唱わせたという。しかし、この楊惲の自暴自棄の態度と比べて、其三詩における作者陶淵明の一途な姿は、およそ同日の談ではない。

ここに至つてはじめて、「方宅十余畝、草屋六七間」という新しい表現を試みた作者の心情を推察できるように思われる。今、作者陶淵明は故郷の田園に帰つてきたわけであるが、それは煩わしい官僚生活からの開放であると同時に、自給自足の経済の始まりを意味する。農村は決して理想世界ではなく、農耕生活には農耕生活の懊悩や辛苦があるはずである。実際に作者は其二・其三詩で実感を込めて述べている。もはや実生活とかけ離れた「五畝の宅」のような表現では、ありのままの生活を描くことはできない。生活の拠点はどの程度の規模なのか、数値化してアウトライン（外形・輪郭）を把握する経済観念が必要である。その新しい生活にかける意欲、自らの力で生きてゆくという意志が、彼に新しい表現を開拓させた、と考えられるのである。

さて、「歸園田居」詩はこの後も続く。今しばらく、その内容を見てみよう。

1 久去山澤遊 久しく山沢の遊びを去り

2 浪莽林野娛 浪莽たり林野の娛しみ

3 試攜子姪輩 試みに子姪の輩を携へ

4 披榛歩荒墟

榛を披きて荒墟に歩む

5 徘徊邱壠間

徘徊す邱壠の間

6 依依昔人居

依依たり昔人の居

7 井竈有遺處

井竈遺處有り

8 桑竹殘朽株

桑竹朽株を残す

9 借問採薪者

借問す薪を採る者に

10 此人皆焉如

「此の人皆な焉にか如く」と

11 薪者向我言

薪者我に言ふ

12 死没無復餘

「死没して復た余るもの無し」と

13 一世異朝市

一世朝市を異にす

14 此語眞不虛

此の語眞に虚ならず

15 人生似幻化

人生幻化に似たり

16 終當歸空無

終に当に空無に歸すべし

(卷二「歸園田居」五首其四)

其四詩では、山野への行樂が描かれる。子どもたちを連れ、「榛」すなわち雑木林をかきわけてゆくと、廢墟となった住居を発見する。昔、人々が住んでいたであろう家はもはや崩れかかっており、井戸や竈のみが遺構として残っている。桑や竹の根株も朽ち果てている。それらはかつてここで営まれていた生活の痕跡である。薪を採る木樵に「この人々はどこに」と尋ねてみると、「死んでしまつて誰もいないさ」と答える。

「歸園田居」詩には、ここまで農耕生活の様子^が描かれてきた。そこにはもちろん充実もあるが、同時に懊悩もある。そのような心の動きを綴ってきた作者に、ここでまたひとつ大きな揺さぶりがかけられる。作者は、この廢墟となった住居に新生活の未来の姿を見出さざるを得なかったであろう。「二世朝市を異にす」という古諺に「此の語眞に虚ならず」と同意し、「人生幻化に似たり、終に当に空無に歸すべし」という嘆きを発するのである。

1 悵悵獨策還

悵悵して独り策つきて還り

陶淵明「歸園田居」五首における住居について

- 2 崎嶇歴榛曲 崎嶇として榛曲を歴たり
- 3 山澗清且淺 山澗清く且つ淺く
- 4 可以濯吾足 以て吾が足を濯ふべし
- 5 漉我新熟酒 我が新たに熟せる酒を漉し
- 6 隻鷄招近局 隻鷄もて近局を招く
- 7 日入室中闇 日入りて室中闇く
- 8 荊薪代明燭 荊薪もて明燭に代ふ
- 9 歡來苦夕短 歡來びて夕の短きに苦しみ
- 10 已復至天旭 已に復た天旭に至る

(卷二「帰園田居」五首其五)

「悵悵」は、未来を垣間見てしまったことから生じた失意の念であろう。彼はかきわけた「榛」を再び通って我が家に戻ってくる。この詩は其四詩からの内容的つながりを保っているのである。やがて近隣の人々を集めた夕食が始まる。醸したばかりの酒を漉し、鷄をつぶしてごちそうとする。日が沈むと屋内も暗闇となるが、高価な油を用いる灯燭はなく、「荊薪」の炎が唯一の明かりとなる。「薪」と言えは其四詩において「死没して復た余るもの無し」と告げた「採薪者」が連想される。また、通常「荊薪」が焚かれるのは竈であろうが、それも「昔人居」における「井竈」の跡を思わせる。楽しい夕餉の場面であるが、作者にとっては単なる「歡來」ではなく、「悵悵」を抱えた上での「歡來」なのである。

しかしながら、その明かりが照らす屋内の何とあたたかなことか。作者の苦しみや悲しみは決して解消されることはないが、たとえ一時的にせよ、おそらく彼はその団欒に慰められ、時間が過ぎることを惜しんだであろう。かくして夜が明けるまで宴は続き、やがて明日を迎える、という形でこの連作詩は締めくくられる。

「帰園田居」詩は連作詩であるためか、ややもすれば農耕生活の様々な一齣を断片的に描いた作品と捉えられることがある。しかし、以上のように見えてくると、そこには紆余曲折を経ながらも一続きとなっている心の遍歴を読み取ることができるのである。

「方宅十余畝、草屋六七間」句は、その中であって、官界から解放された喜びや新生活への期待を込めて詠じられたものと見てよい。しかし、そのみでは理解としては不十分なのであって、これから農村で生きてゆくという作者の強い意志こそが、この新しい表現を生む原動力となっているのである。のみならず、農耕につきまとう不安や辛苦に耐える作者の姿（其二・其三）も、やはり農村で生きる意志を抜きにしては理解できないであろう。また、未来への幻滅によって打ちひしがれた作者（其四）が、其五詩の団欒によって取り戻したのも、ここで生きてゆくという意志に違いあるまい。本稿は「方宅十余畝、草屋六七間」句の解明を目的として出発したが、結果的に「帰園田居」五首全体を理解するための鍵を握ったと言えるよう。

注

- (1) 増野弘幸「陶淵明における庭の表現について」（『新しい漢字漢文教育』35号、二〇〇二年）、同氏「陶淵明における家の意味について」（『大妻国文』36号、二〇〇五年）、同氏「陶淵明における柳の意味について」（『石川忠久先生星寿記念論文集 菊を採る東籬の下』二〇二一年、汲古書院。73～94頁）。また、中尾健一郎「陶淵明居宅考」（『梅光学院大学論集』42号、二〇〇九年）、下定雅弘「陶淵明と白樂天 生きる喜びをうたい続けた詩人」（『角川選書』508、二〇一二年、角川学芸出版。94～116頁）においても、理想的空間の表出という方向から分析が加えられている。中国においても、彭曉芸「詩人はいかにして『住まう』か——陶淵明の詩的住居についての試論（詩人何以『居』？——試論陶淵明的詩意棲居）」（『仏山科学技術学院学報 社会科学版』二〇〇六年二期）、張虎昇「詩的住居——生活詩人陶淵明を論ず」（詩意的棲居——説生態詩人陶淵明）（『写作』二〇〇六年十五期）以降、議論が盛んになっている。

- (2) 本稿では、陶澍注 戚煥埜校「靖節先生集」十卷（一九五六年、文学古籍刊行社）を底本とする。

- (3) 編年は、遼欽立「陶淵明事迹詩文繫年」（同氏『陶淵明集』二〇〇八年、中華書局。216頁。初版は一九七九年）に従う。以下、参考文献は新しい刊行年のものを参照し、引用頁もそれに拠るものとする。

- (4) 方宅十余畝、謂宅地較寛。『晋書』吳隱之伝「数畝小宅、内外茅屋六間」。晋畝較現在小。注（3）所掲の遼欽立『陶

陶淵明「帰園田居」五首における住居について

淵明集』41頁。

- (5) 方宅、方形的住宅。這句說住宅占地面積有十余畝。按、晉時一畝的面積沒有今天的一畝大。唐滿先『陶淵明集淺注』(一九八五年、江西人民出版社。55頁)。

- (6) 方、方円。這句說、宅地寬闊、共有十多畝。孫鈞錫『陶淵明集校注』(一九八六年、中州古籍出版社。42頁)。

- (7) 上句言宅屋周圍之園、下句言宅屋。方、方円、周圍。袁行霈『陶淵明箋注』(二〇〇三年、中華書局。80頁)。

- (8) 斯波六郎『陶淵明詩訳注』(一九八一年、北九州中国書店。181頁。初版は一九五一年、東門書房)。

- (9) 一海知義『陶淵明』(世界古典文学全集、一九六八年、筑摩書房。40頁)。なお、『詩経』魏風「十畝之間」詩の鄭箋

は周代の井田を想定した解釈と思われるが、「百畝」は田地の意であろう。

- (10) 都留春雄・釜谷武志『陶淵明』(鑑賞中国の古典13巻、一九八八年、角川書店。106頁)

- (11) 田部井文雄・上田武『陶淵明全釈』(二〇〇一年、明治書院。76頁)。

- (12) 「詩的住居と静かな情熱——陶淵明『帰園田居』五首の復元と解釈(詩意地棲居与沈静的激情——対陶淵明『帰園田居』五首的還原闡釈)」(『文学遺産』二〇一一年五期)。「方沢」は広大な湖沼の意である。范氏は「湖田(湖辺に開いた水田)」の意で用いたとするが、十畝(516m)あまりの田地(湖田)を「方沢」と称するのは無理があるように思われる。

- (13) 「居」は占める意である。「得百年者千無一焉。設有一者、孩抱以逮昏老、幾居其半矣(百年を得る者は千に一無し。設ひ一者有るも、孩抱より以て昏老に逮ぶまで、幾ど其の半ばを居む)」(『列子』楊朱)、「仲尼門徒升堂者七十有二、顔氏居八人焉(仲尼の門徒の堂に升る者七十有二、顔氏八人を居む)」(『顔氏家訓』誠兵)と同じ用法である。

- (14) 注(3)所掲の遼欽立『陶淵明集』は「北塘」に作る。その場合は北側の垣根の意になるが、いづれにしても住居に隣接していると考えられる。なお、この詩は同氏「陶淵明事迹詩文繫年」では、義熙五年(四〇九)、「園田居」在住時の作とされる(217頁)。

- (15) 東哲とその作品については、上田武『陶淵明と東哲』(『新しい漢文教育』十九号、一九九四年)を参照。

- (16) 汪紹楹校『芸文類聚』(一九九九年、上海古籍出版社。初版は一九六五年)を底本とする。

- (17) 余嘉錫『世說新語箋疏』（一九八三年、中華書局）を底本とし、篇題下の番号も同書に基づいた。
- (18) 東晋の一步は1.467mであり、古法（100平方歩）では一畝=215.2m²、今法（1140平方歩）では一畝=516.5m²となる。
- (19) 李長路・趙威点校『江文通集彙注』（一九九九年、中華書局。初版は一九八四年）を底本とする。
- (20) 盧振華点校『梁書』（一九九七年、中華書局。初版は一九七三年）を底本とする。
- (21) 王国梁「詩的住居——陶淵明が描く廬の含意の分析（詩意的棲居——浅析陶淵明筆下廬的意蘊）」（『劍南文学』二〇一三年一期）では「不正確な数字（不準確的数字）」とした上で、そこに陶淵明の自由さを見出そうとする。しかし、筆者は「五畝の宅」との比較から、作者の現実的な生活感覚の表出と考えるものである。
- (22) 陸錫興主編『中国古代器物大詞典・建築』（二〇〇七年、河北教育出版社。「間」の項、222頁）を参照。なお、「間」を「部屋」の意とする注釈も多いが、本稿では採らない。
- (23) 朱金城箋校『白居易集箋校』（二〇〇三年、上海古籍出版社。初版は一九八八年）を底本とし、作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（一九七四年、朋友書店。初版は一九六〇年）に基づいた。訳注として岡村繁『白氏文集』（新釈漢文大系。二上、二宮俊博氏担当、二下、柳川順子氏担当、ともに二〇〇七年。三、竹村則行氏担当、一九八八年、明治書院）を参照。紙幅の都合上、必要な箇所のみを挙げる。
- (24) 「養竹記」（『白氏文集』卷四十三・一四七四）に「始於長安求假居處、得常樂里故關相國私第之東亭而處之（始め長安に仮居の処を求め、常樂里の故關相國の私第の東亭を得てこれに處る）」とある。
- (25) ここでは福永光司『莊子内篇』（新訂中国古典選第7巻、一九六六年、朝日新聞社。149頁）に従って「白」を「ひかり」と訓じた。崔譔注に「白者日光所照也（白は日光の照らす所なり）」とある。本文は『続古逸叢書』（二〇〇一年、江蘇古籍出版社）所収本を底本とする。
- (26) 『文選』（一九九四年、上海古籍出版社。初版は一九八六年）を底本とする。
- (27) この時代の竈の形式については、浅川滋男『住まいの民俗建築学 江南漢族と華南少数民族の住居論』（一九九四年、建築資料研究社。142～143頁）を参照。

陶淵明「帰園田居」五首における住居について

- (28) 木樵などの山に入って薪を採ることを業とする人々のイメージについては、塚本信也「芻蕘の諸相」(『東北大学中国語学文学論集』16号、二〇一一年)を参照。
- (29) この部分も含めて「帰園田詩」五首における内容の連続性については、注(10)所掲の都留春雄・釜谷武志『陶淵明』(105～120頁)に既に指摘されている。本稿執筆に当たって参考にした。
- (30) 其一詩第18句「虚室」の出典である『莊子』人間世篇において、「白」は幸福を比喻するものであったことも想起される。